

ういろうり
外郎売り

だいいちだん
第一段

せっしゃおやかた もう おたちあい うち
拙者親方と申すは、御立会の中に、

ござん かた
御存じのお方もござりましようが、

えど た にじゅうりかみがた
お江戸を立てて二十里上方、

そうしゅうおだわらいつしきまち
相州小田原一色町をお過ぎなされて、

あおものちよう のぼ いで
青物町を登りへお出なさるれば、

らんかんばしとらやとうえもん
欄干橋虎屋藤右衛門、

ただいま ていはついた えんさい なの
只今は剃髪致して、円斎と名乗りまする。

がんちよう おおつごもり
元朝より大晦日までお手に入れまする此の薬は、

むかしちん くに とうじん ういろう ひと ちようき
昔陳の国の唐人、外郎という人、わが朝へ来たり、

みかどさんだい お
みかどさんだいのお
帝へ参内の折りから、

こくすり ふこ お
此の薬を深く籠め置き、

もち とき いちりゆう
もち とき いちりゆう
用ゆる時は一粒ずつ、

かんむり すま と だ
冠の透き間より取り出す。

よつてその名を帝より、透頂香と給わる。

すなわち文字には頂き、透す、香と書いて、『とうちんこう』と申す。

ただいまこくすりことほか、せじょうひろ、
只今は此の薬殊の外、世上に弘まり、

ほうぼうに偽看板を出だし、

イヤ、小田原の灰俵のさん俵の炭俵のと、いろいろに申せども、

ひらがな
平仮名をもつて「いろいろ」といたしたは、親方円斎ばかり。

もしやお立会の内に、熱海か塔ノ沢へ湯治にお出なさるるか、

または伊勢御参宮の折からは、必ず門違いなされますな。

お上ならば右の方、お下りなれば左側、

はっぼうやつむねおもてみつむねぎょうくどつづく
八方が八棟、表が三ツ棟玉堂造り。

破風には菊に桐の臺の御紋を御赦免あつて

けいずただくすり
系図正しき薬でいぢる。

第二段

いやさいぜん かめい じまん もう こそんじ かた
イヤ最前より家名の自慢。ばかり申しても、御存知ない方には、

しょうじん こしょう まるの しらかわよふね
正身の胡椒の丸呑み白河夜船。

さらば いちりゆう
さらば 一粒 たべかけて、その気味合をお目にかけてみましょう。

まこくすり ひとつぶした うえの
先ず此の薬をかように一粒舌の上に載せまして、

ふくない おさ いや どうも 二云えぬは、
腹内へ納めますると、イヤどうも二云えぬは、

いしん はい きも すこ
胃・心・肺・肝が健やかになつて

くんぷうのんど きた こうちゆうびりよう しょう
薫風咽候より来り、口中微涼を生ずるが如し。

ぎよ ちよう きこめんるい くいあわ ほかまんびようそっこう かみごと
魚、鳥、木の子・麴類の喰合せ、その外万病速効あること神の如し。

こくすりだいいち きみよう したまわ こと ぜに はだしに
さて此の薬第一の奇妙には、舌の廻る事が錢ごまが跣足で逃げる。

ひよつと したまわ だ や たて
ひよつと舌が廻り出すと、矢も楯もたたらぬじゃ。

いっすんさき 二ぼとけ けつまず
一寸先のお小仏のお蹴躓きやるな。

ほそごぶ
細溝にどじよによりり、京のなま鱒奈良なま学 鱧、ちよと四五貫目。 まながつお しごかんめ

ちやた ちやた
お茶立ちよ茶立ちよ、ちやつと立ちよ茶立ちよ、青竹茶 筥でお茶 ちやつと立ちよ ちや ちや

第四段

くるは来るは何が来る、高野の山のおこけら小僧、 やま こぞう

たぬきひゃつびき はしひやくぜん てんもくひゃつばい ぼうはつびゃつぼん
狸 百匹、箸 百膳、天目 百杯、棒 八 百本。

ぶぐ ばぐ ぶぐ ばぐ みぶぐ ばぐ あ ぶぐ ばぐ むぶぐ ばぐ
武具・馬具・武具・馬具・三武具馬具、合わせて武具・馬具・六武具馬具、

きく くり きく くり あ きく くり むきく くり
菊、栗、きく、くり、三菊栗、合わせて菊、栗、六菊栗。

むぎ 二み むぎ 二み みむぎ 二み あ むぎ 二み むむぎ 二み
麦、塵、麦、塵、三麦塵、合わせて麦、塵、六麦塵。

なげし ながなぎなた た ながなぎなた
あの長押の長薙刀は、誰が長薙刀ぞ。

む 二まがら え 二まがら ま 二まがら
向この胡麻殻は荏の胡麻殻か、真胡麻殻か、あれこそほんのまの真胡麻殻。

がらびいがらびい 風 車。
かざぐるま

お 二ほうし お 二ほうし ゆんべ 二ほ また 二ほ
起きやがれ小法師、起きやがれ小法師、昨夜も溢して又溢した。

たあふぼぼ、たあふぼぼ、ちりから、ちりから、つつたつぽ、

たつぽ たつぽ ひいだこ お
たつぽ たつぽ 干 蛸、落ちたら煮めて食おう。

煮ても焼いても喰われぬ物は、

五徳 鉄弓かな熊童子に、

石熊石持ち、虎熊虎ぎす、

なか 中にも東寺の羅生門には、茨木童子がうで栗五合つかんでお蒸しやる。

かの頼光の膝元去らず。

第五段

ふな きんかん しいたけ さだ ごたん そばき そうめん うどん ぐどん こしんぼち
鮎・金柑・椎茸・定めて後段な、蕎麦切り素麺、饅頭か愚鈍な子新発知。

こだな こした こおけ こみそ こあ こしやくしも こすく こよ
小棚の小下の小桶に、小味噌が小有るぞ、小杓子小持つて小掬つて小寄せ。

おっと合点だ、心得田圃の川崎・神奈川・ほどがや・とつかはし
がってん こころえたんぼ かわさき・かながわ・ほどがや・とつかはし
おとと合点だ、心得田圃の川崎・神奈川・程ヶ谷・戸塚は走つて行けば、

やいと すむ さんり ふしさわ ひらつか おおいそ
灸を擦り剥ぐ三里ばかりか、藤沢、平塚、大磯がしや、

こいそ しゆく なな お そつてんそうそう そうしゅうおだわら とうちんこう かく ござ
小磯の宿を七つ起きして、早天早々、相州小田原、透頂香、隠れ御座らぬ。

きせんぐんじゆ はな おえど はな
貴賤群衆の、花の御江戸の花いろいろ。

あれ はな み おこころ おやわ やい うぶこはうこ
あれあの花を見て、御心を御和らぎやと言う、産子・這子に至るまで、

こ ういろう ひひょうばん ござん な もつ
此の外郎の御評判、御存じ無いとは申されまいつぶり、

つのだ ぼうだ まゆ うす きね すりばち ぐわらぐわらぐわら
角出せ棒出のせぼうぼう眉に、白、杵、播鉢、ばちばち桑原桑原桑原と、

はめはず こんにちおい いずれもさま あ
羽目を外して今日御出での何茂様に、上げねばならぬ、売らねばならぬと、
いきひ ぱり、とうほうせかい くすり もとじめ やくしによらい しょうらん
息せい引つ張り、東方世界の薬の元締、薬師如来も照覧あれと、

ほほうやま ういらう
ホホ敬 って外郎はいらっしやりませぬか。